

令和5年度第2回北海道立函館美術館協議会会議録

- 1 日 時 令和6年3月1日(金) 10:00~11:15
- 2 会 場 北海道立函館美術館 講堂
- 3 出席委員 仲井会長、元木副会長、今村委員、大瀧委員、熊木委員、桜花委員、
武井委員、梨木委員、鶴野委員、吉田委員
(欠席委員：石岡委員、川村委員)
- 4 傍 聴 者 報道関係者1名(北海道新聞社)
- 5 議 事

(1) 報告事項

令和5年度事業実施状況について

事 務 局：資料1「令和5年度事業実施状況書」に基づき説明。

委 員：ボランティアいちいの会との連携について、前回の会議で他の委員から売店のキャッシュレス化の話があった。事務局の説明の中で、バーコードを使用して会計ができるようになり改善されたとの話があったが、キャッシュレス化は難しいのか。時代の流れで現金を持たない人が多くなっている。いちいの会は一生懸命やってくれていると思うが、もう少し違う運営の形があってもいいのではないか。一般の主婦としては、自分も行きやすいし、子どもを連れて行った時でも、物販や喫茶コーナーなど利用しやすくなるのではと思う。いちいの会でも策を練ってくれていると思うが、違う方法はないかと思って聞いていた。

委 員：来場者数について、美術館に実際入ってきた人数なのか、展示室に入った人数なのか、どのようにカウントしているのか。他の道立美術館でもカウント方法は同じなのか。

事 務 局：カウント方法は同じである。チケットは特別展、常設展、同時観覧券があり、特別展のチケットだけを買う方もいれば、常設展も観覧する方もいる。来館者は受付のチケットの発券枚数とリンクしている。我々としては特別展と常設展の両方を見ていただきたいが、特別展だけを見たい方もいるため、常設展と特別展の観覧者数に差が出ている。

委 員：美術館内に入って来られた方の人数というより、展示室内に入った人数をカウントしているということではよいか。

事 務 局：はい。

委 員：講演会事業で、津軽弁による朗読が非常に人気だったと聞いているが、どのような内容だったのか。

事 務 局：常設展「中野北溟《津軽》」で、書家中野北溟氏が津軽弁で書かれた高木恭造氏の詩基に書いた作品を、青森出身の方に朗読していただいた。

委 員：そうであれば、講演会後も録音を再生して聞けるようであればいいと思った。

委 員：前回の会議で、資料のフォーマットについて話したが、単純に事業の参加者の充足率がわかりにくい。ワークショップでは、何名を募集してこの参加人数

になったのかわかるか。

事務局：事業によるが、講師とも相談の上、ワークショップごとに定員を定めており、10名～15名程度である。中には定員割れしている事業もある。

委員：多い方がいいと言っている訳ではなく、少なくとも参加者が深く理解して、また来たいなどと思ってもらい、子どもの参加者を増やすことも重要である。強弱をつけて実施することが良いと思った。この資料では、参加者が少なく見えてしまうので、「結構集まっているんですよ」ということがわかるように、募集人数を明記すると思う。

委員：特別展の観覧者目標人数について、ひとつひとつ学芸員の思い入れがあって企画したと思うが、来館者によって、興味のある展示と、そうでない展示があるかもしれない。開催日数によると思うが、実際、目標人数と観覧者数にそれほど差がないようである。この目標人数はどのように決定しているのか。

事務局：目標人数は、当館職員の協議により決めている。展覧会の内容や年齢層、開催期間、過去の同様の展示での実績を加味し、それより若干高めに設定している。

委員：新・山本二三展は、5月にコロナが5類に移行になったということもあり、5月に入って観覧者数が増えて来たのかと思う。実績は目標に近い数字になっている。

(2) 協議事項

ア 令和5年度道立美術館評価（案）について

事務局：資料2「令和5年度道立美術館評価（案）」に基づき説明。

委員：Bの「多彩で特色ある展示活動の充実」の「観覧者に占めるリピーターの割合」について、リピーターとは前の展示を見て、次の展示を見に来た方ということか。

事務局：以前、当館を利用したことがある方である。

委員：リピーターはどのようにカウントしているのか。

事務局：利用者アンケートの集計値を使用している。

委員：実際はもっとリピーターがいるのではないか。

事務局：来館者全員にはアンケートに協力いただけないため、これより高い可能性はある。

委員：実際はもっと多いような感じがする。今回評価基準が変わり、評価しづらくなったといった歯がゆさはあるか。

事務局：この評価制度は、今年度が1年目であり、実際に評価を作成した感想として、ある程度評価基準が明確になり、「過去5年間の最高値」といった機械的な目標値ではなく、自ら「これくらいできる」と目標を立てて取り組むことは、成果が見えやすく、振り返りがしやすいと感じた。

委員：以前より評価しやすいとのことだが、最初に立てた目標に結果が左右されるため、目標設定が重要になる。

委員：アンケートの元々の母数事態に疑問があり、それを基にすることは危険だと

感じる。アンケートを基にするのも全道的なものなのか。アンケートの項目も共通か。

事務局： アンケートは共通で示されたものを使用している。

委員： アンケートに答える人はかなり少ないというのが定説かと思う。かなり工夫をしないとアンケートに答えてくれる人は増えないし、アンケート結果も信憑性の高いものにはならない。質問の項目も精査が必要。現場の意見や肌感覚のようなものも生かして改良されると、さらに有効なものとなり、PDCAがうまく回るようになるのではないかと思う。

イ 令和6年度運営計画（案）について

事務局： 資料3「令和6年度運営計画書（案）」に基づき説明。

委員： 次年度の展覧会の目標人数をお聞きしたい。

事務局： 次年度の目標人数は、年度始めに決定する予定である。

委員： 映像事業として美術映画会が開催されているが、参加者が少なく、美術館の活動とも連動していない。それほどコストはかからないし、講堂も使わないよりはいいのかと思うが、わざわざ見に来る人は少ないのではないかと。興味のない人には響かないコンテンツであるという気がしている。今後どうしていくとか、お考えがあるのかお聞きしたい。

事務局： ご指摘のとおり、このコンテンツが魅力的で大勢の人が来るのかということ、そうとは言いがたい。中には、常連の方がいて、毎回来てくれる方もいるため、どこで止めるかは悩みどころである。美術映画会では、上映権付きDVDを買って上映しているが、最近はYouTubeなど、自宅のパソコンで無料で見られる機会が増え、DVD自体が作られなくなっている。そのような状況のなかで、美術館に映画を見に来る世代は減って行くと思われる。

委員： うまく展覧会と連動して活用できればいいと思う。

事務局： 展覧会と合致するようなコンテンツが常にあるかということ、そもそもの数が減っているという問題があり、その中で上映権付きDVDとなるとさらにハードルが上がるので、悩んでいるというのが正直なところである。

委員： 観覧者数が昨年度より1万人上回っているということは、人気のある特別展や多彩な事業があったからだと思うが、新たな試みもこの数字に表れているのか。それらを踏まえて検証し、次の年度に生かしていければと思う。

事務局： 観覧者数も重要だが、函館美術館の役割としては、この地域で発信すべきもので、これまで出来ていなかったものもあるため、今後も新たな知見で様々なものを組み合わせながら紹介していければと思っている。

委員： 全体を通してご意見、ご質問はありますか。

委員： 今回、夫と新・山本二三展に行った。夫は今まで、自分がマナーを守って観覧できるか不安で、ハードルが高いと感じ、美術館に行きたくなかったが、実際に行ってみると、私よりも一生懸命見ていて、とても楽しそうに、私より長く見ていた。今回、このように初めて美術館に行く人の興味をそそるような

展示があり、次回も誘ってみようと思っている。リピーターもそうだが、初めて美術館に行く方が一步を踏み出せるような企画があればよいと思った。もう一点、美術館評価のBのところで、観覧者に占める児童生徒も割合が達成できなかったとあったが、新・山本二三展はすごく多く入っていた。展覧会と事業を考えることはなかなか難しいと思うが、もう少し一般の方々が来られるような展覧会であればよいと思っている。光ミュージアムの肉筆浮世絵はとても興味があり、行ってみたい。あともう一点、私は遠方でなかなか函館に行くことが出来ないが、皆さんは通院や買い物などで結構函館に行っていると思う。そのついでに美術館に行ってみようかというきっかけ作りとして、学校対象に実施しているオンラインアート教室を、各地でやっていただけたらいいなと思った。

委員：三つほど思ったことがあった。一つは、リピーターの把握あるいは増加のための策である。私はかつて札幌の赤レンガホールで、年間パスポートを買って楽しんでいたり、また、道外の友人が、函館のコーヒーショップのチケットを綴りで買って、また来なくちゃと喜んでいたりすることがあった。東京ディズニーランドも年間パスポートがある。複数回来館できるような、いわゆる年間パスポートのようなものがあると実数把握がしやすいと思う。また今年は、名探偵コナンの映画の舞台が函館であり、文化部系の方が来館するキーでもあるため、道外の方が常連になるということも視野に入れてよいかと思った。二つ目は、初めて美術館に足を運ぶ人をどう増やすかということで、ツイッター、Xを拝見している中で、投稿数も大事だが、例えばインプレッションの数や、どう拡散されたかというリツイートの数などを把握するのもよいかと思った。また、一般的なキーワードでハッシュタグを付けることで、全然興味のなかった人が気づいてくれることがある。最後に、その他の事業で、館内での音楽のコンサートが次年度も行われるということで、とてもいいと思う。展示を見たという体験に加えて、買い物をする、お茶を飲む、常設展を見る、コンサートを聴く、そういった体験を増やすことが、カンフルになるかなと思った。

委員：今年度も次年度も、多彩な取組をいろいろ工夫されているなど感心している。以前の協議会で、新・山本二三展を楽しみにしているという話をしたが、小学生のお子さんに、私が「面白そうだから行ってごらん」と言ったら、「もうじいちゃんが券買ってくれた」と言って、本人は行きたいとか何も言ってなかったのに、好きだろうと券を買ってくれていたということがあり、このようなことが来館者数に繋がっているんだなと思った。数字だけではないかもしれないが、やはり日本ねこ歩き展など人気のある特別展の人数が増えることが、常設展の人数に連動していた。先ほど次年度の展覧会の説明があったが、タイトルだけではなく、写真の撮り方などの話を聞けると、展覧会への興味・関心も高まる。展覧会を知らせる際の工夫で一体感が伝わり、タイトルだけではそれほど関心を持たない人が行ってみたいと思うようになればよいと思う。次年度も楽しみにしている。

委員：学芸員が本当にこの仕事が好きでやられているんだという思いが伝わってきた。裏話なども発信すると「面白そうだ、行ってみよう」となるのではと思った。